

書を抱えてフィールドに出よう!



『生命 (いのち) の旅、シエラレオネ』

著者：加藤寛幸
出版社：ホーム社 2023年2月発行

しみ、死を意識しながら「生きるこの意味」を探していた著者のもとに西アフリカでアウトブレイクが発生したエボラウイルス病対応の派遣要請が届きます。効果的な治療法や薬はなく、もちろん日本にあるような設備にアクセスすることも不可能。そんな「またあとで」や「また明日」が許されない、エボラとの戦いの最前線で著者が見たこと、感じたことがひしひしと伝わってきます。

シエラレオネ、南スーダン、エボラウイルス病と聞いてもどこか遠くのこのように聞こえるかもしれません。しかし、本書ではポロポロと手のひらからこぼれていくように亡くなるエボラ患者たちと

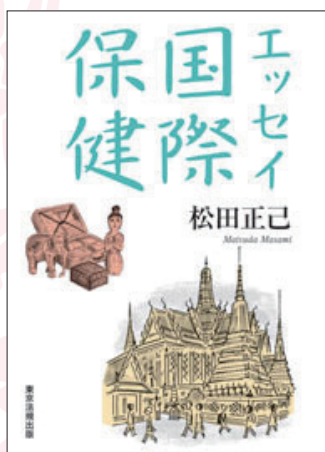
何かできないかと足掻く国境なき医師団スタッフたちの存在が、まるでその現場を目の前で見ているかのように迫ってきます。

国際協力とは、人道支援とは何なのか。生命とは、生きるとは... シエラレオネで生きる人たちを知るうちに、著者の悩みと共にそんなことを考えさせられます。難民数が増加する一方の世界で、国際協力や医療分野に興味のある方はもちろんですが、そうでない方や学生さんたちにも読んでいただきたい一冊です。

(紹介者：柴原史歩)

国境なき医師団日本事務局の会長を務められた著者、加藤寛幸さんは2003年より複数回に及び国境なき医師団の活動に参加し、アフリカやアジア他、東日本大震災など国内の災害支援にも従事されてきました。

2014年、南スーダンでの活動後からPTSD (心的外傷後ストレス障害) に苦



『エッセイ 国際保健』

著者：松田正己
出版社：東京法規出版 2022年12月発行

という現象を通じて、私たちの生活は大きく変わりました。それはこの分野でも同じだったと思います。ですが、変わらないのは、私たちが大切にすべきなのは人とかかわりである、ということ。そして、どこにいても、必ずグローバルヘルスという現場につながるヒントは転がっている、ということ。身近なところから世界につながるヒントがあり、また世界を知ること、身近な大切な存在について考えることにつながる。著者とともに、あの時の記憶を追体験しながら、そんなことを教えてくれる一冊です。説明文や物語と違い、エッセイは著者の感情に直接触れ合えるのが魅力です。人との

関わりが恋しかった際の記憶だからこそ、より一層沁みるものがあります。生活が大きく変わる中で、いろいろな制限を受けました。ですが、その制限の中でも、私たちは前に着実に進み続けたと思います。日常生活が戻りつつあり、少し落ち着きを取り戻されそうになりつつある今、苦しかったあの時の私たちの歩みを、ゆっくりと本書を通じて、著者とともに振り返ってみませんか。

(紹介者：佐伯壮一朗)

グローバルヘルス、という単語を初めて聞いた時の気持ちを覚えているでしょうか。なんだか不思議!でもかっよさそう!なにをするんだろう?海外とか行くのかな?いろいろなかかわり方ができるのがこの分野の魅力ですが、皆さんはどのようにお過ごしでしょうか。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)